



成長と老化

小児科医師 中山 真里子

目にも美しい青葉、かぐわしい風、五月晴れ、本来の日本の5月の様相です。なんとといっても“目に青葉、山ほととぎす、初松魚(はつがつお)”なのです。ところが今年の5月はそれからは何とほど遠いのでしょうか。気温の上昇が激しく、3月頃の気温かと思うと真夏日となり、台風並みの暴風雨に見舞われ、温暖な気候ではなくなっています。

そう言えば4月の若狭マラソンの前日、東北、北海道では雪が降り、福島から参加の弟は雪のため例年より小浜到着がかなり遅れました。明らかに変ですね。自然は人間の力ではどうすることもできないとは言え、この変化は人間がもたらしているようです。“ストップ温暖化!”一人一人の出来ることは小さなことでも積み積もれば大きな力となります。今、できることをしてゆくしかありませんね。次世代に五感で感じる美しい日本を残すために!

話は変わりますが、変化と言えば最近、小さい時は患者さんだった方達がお母さん世代になり、出産され、その赤ちゃんをみせていただくことが増え、歳月のながれをあらためて感じます。気が付けば生意気盛りの息子に背を越され、久しぶりに会った母はさらに小さくなっていました。できるようになったことが増えていっている息子と対照的にメールも誤交換、ひらがなばかりと以前は出来ていたことが出来にくくなっている母の姿に人間の人生を感じます。まさに“初め4本、その次2本、そして3本、なあと”のなぞなぞの通りです。やがて私も…と思うにつけ、以前は全く気にも留めていなかった“老後”という言葉が少しずつ現実味を帯び、迫ってきました。平等にやってくる老い、でも“ストップ老化”とはいかないまでも、その姿は多少なりとも変えることができるはず。努力次第ではなるべく3本になるのを遅らせ、いつまでも自分自身で動き回りたいものです。(あまり節制、節制と言わず、よく飲み、よく食べ、よく遊びの方がよいのかも… などと思いながら)

天候不順の折、皆様には体調を崩されませんように、御身ご自愛下さい。

《学習》 医療 不育症

せっかく妊娠しても流産、死産を繰り返す「不育症」。なかなか妊娠しない不妊症に比べて認知度が低く、患者数や治療成績などの実態はよく分かっていませんでした。

ところがこの3月に厚生労働省の専門医の研究班がまとめた調査報告で、現状が少し分かってきました。

「不育症」の流、死産の回数には定義はないのですが、3回以上の連続流産の場合は「習慣流産」と呼びます。それより患者さんの対象はひろく、一つの疾患とされません。流産の確率は年齢とともに上がります。晩婚、晩産化が進む中で不育症は深刻な問題、疾患と捉えなければなりません。

研究班によれば、妊娠経験者の6、1%が2回以上の連続流産を経験し、不育症患者は現在までに2百万人以上になっていると推計しております。そして毎年、4万人の方が発症していると考えてよい、ということです。

ある女性(38)の場合、2003~4年に3回の流産を経験し、双子を含む4人の子を失いました。いずれも胎児の心拍が確認された後、妊娠8~10週の妊婦検診で胎児の死亡が分かりました。

2回目の流産の後、不育症という疾患であるということを知りました。検査の結果、血液が固まりやすく、血栓が出来やすい体質であったのです。そこでこの女性は妊娠判明前から、血液をサラサラにする錠剤を服用。判明後は初期流産の起こりやすい妊娠11週までの50日間入院し、血液予防の薬剤点滴も受け、06年に念願の第1子を出産。第2子もできました。「検査で原因が分かり、治療をすると子供が持てるんだ」と分かった時は本当に嬉しかったということです。(中日新聞 5/7「医療と社会」より)

映画 「クロッシング」

4/21、東京・渋谷にある「ユーロスペース」というひっそりとした映画館で鑑賞しました。大きな名だたる小屋(映画館)ではその筋の圧力で上映できないようです。

(松井)

北朝鮮の北部の炭坑町の坑夫ヨンスはサッカー選手として勲章までもらった人物だが妻のヨンハが結核に冒されても薬がない。ヨンスは豆満江を越え中国で購入しようとする。脱北者は食べ物になり、妻の元に残した息子ジュニとも悲惨の極みに陥る。権力と地位と体制を守ろうとする巨悪の恐ろしさを痛感する。首領を謝ませ、非難できる日本の幸せをつくづく有り難いと思った。